

ユニバーサル・プロジェクションと 宮沢賢治「『春と修羅』 序」について

矢 谷 慈 國

On Universal Projection and Kenji Miyazawa's
'Foreword of *Haru to Shura*'

Yoshikuni YATANI

序

これまで、いくつかの論考¹⁾の中でユニバーサル・プロジェクション（「宇宙論的投企」と訳すが、以後は略して「U.P.」と表記する）について述べてきた。それらの論述を展開する時、いつも筆者の思考の中に「チラチラと光を送り続けてきたもの」が宮沢賢治の諸作品であり、その中でも特に「春と修羅 序」と「農民芸術概論綱要」²⁾に表現されている体験様式と思想であった。上記二つの文章には詩作品や童話作品には断片的にしか表現されていない、賢治の自己観・世界観・宇宙観・宗教観・芸術観・科学観が、めずらしく圧縮した形で体系的に表現されているからである。

いつの日にか、きっと、この二つの賢治の文章についてのコメントを書きたい、書かねばならないと筆者が思い始めてからすでに二十年余の歳月が過ぎた。

現象学的生活世界論と多元的リアリティ論³⁾、身体論、象徴論（疎外論を含む）、知識論、に一貫して取り組んできた筆者の思考は、1983年の論文において、すでに「U.P.を、人間と自然、個人と社会、精神と身体の間を二元論的に分割して取り扱うのではなく、それらを一体連続としてとらえ、体験する様式」と定義していた。それが賢治の思想に根本的な関連をもっていることはよく解っていたのだが、それだけでは不十分と思われた。

その後筆者の思考が、一方では、量子重力論の宇宙観や生物進化、社会進化から地球生態系の危機の問題へと拡大し、他方では禅の語録や法華経などとの出会いによって、宗教的体験の理解において深化するにしたがって、永年あたため続けてきた宮沢賢治のこれら二つの文章に対して、筆者独自の観点から論述することができる機縁が熟してきた。「今なら書ける。今、

書くべきだ」という筆者自身の思想的な内的必然が頭をもたげてきたのである。

本稿では、まず第一章において筆者の考える「U.P.」の考え方について要点を示し、それが第一図「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典（案）」という図式にまとめうることを説明する。

次に第二章では、第一図の名称のヒントとなった賢治の童話「銀河鉄道の夜」⁵⁾の当該箇所を引用し、筆者の考案したその図が、賢治の考えていた「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典」の構想に対応するものであることを示す。その際、「現象学的な時間体験についての考察」が参照される。

第三章においては、それらの考察をふまえて、本稿の主題である「春と修羅 序」についての論考を行う。この文章の各行について逐行的にコメントを与えることによって、賢治の四次元芸術の構想が、二十世紀末の今日にとっても「新しい、リファインされた U.P.」の構想であり、斬新な「多元的リアリティの統合」の構想であることを示して本稿を終える。四次元芸術のより体系的な宣言文である「農民芸術概論綱要」については、次稿で取り扱う予定である。

第一章 量子重力論の宇宙観と「U.P.」から 「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典（案）」へ、

最近の量子重力論の宇宙観によると『宇宙は約 150 億年前、「無」あるいは「真空」のゆらぎ（相転移）によって、高い真空のエネルギーをもち、素粒子よりも小さな宇宙が突然生まれ、それが大膨張を起して成立した』とされている。その出発点、あるいは宇宙成立以前の状態は、「時間・空間・物質・エネルギーの区分のない状態、すべてを可能性として含んでいるが、それらが分かれていない状態、すべてを生み出す原無」と定義される。

この真空あるいは無という原初の秩序が、もしゆらがず、相転移を起こさなかったならば、現在あるような宇宙も地球も生命も、我々人間も成立しなかったことになる。

とにかく無から宇宙は成立し、約 46 億年前に、今のところ宇宙の無数の星たちの中で、たった一つの「生命の惑星」である地球が誕生した。地球は例外的に生命を生み出す好条件に恵まれた惑星だった。内部の熱をゆっくり冷やすのに十分な大きさをもち、しかも太陽からの距離が近すぎも、遠すぎもしなかったために、表面に大量の水が存在する「水惑星」となり得た。地表の 70 パーセントが海で残りの 30 パーセントが大陸である、という好条件の中で、約 35 億年前に海の中で生まれた生命は進化し、やがて陸上へも進出し、多様な生物種が、水や大気や土壌と共に共存して生きうる「地球生態系」⁶⁾が⁶⁾つくり出された。

生物進化の過程の中で最も新参者である人類の祖先、アウストラロピテクスは約 200 万年前に地球上に現われ、さらに進化を続けた。現在の我々すべての直接的先祖、ホモサピエンスが

出現したのは、わずか数万年前、早く見積っても十万年程前の、ごく最近のことである。

ホモサピエンスは地球上での出現以来、約1万年前までは、狩猟採取を生活形態とする、ごく単純な構造の、⁷⁾環節分化的未開社会の段階にあった。

人類が約1万年前の農業革命とそれに引きつづく都市国家革命をへて、古代的な文明段階に到達したのは、数千年前のことである。この段階と次につづく中世社会とを一括して、筆者は、⁸⁾層分化的古代中世社会と位置づけている。この段階の人類は地球上で諸文明の興亡をくりかえしつつ、人口増殖と自然破壊を続けたが、地球生態系そのものを破壊するまでには至らなかった。

だが、約300年前から西ヨーロッパで起った産業革命・資本主義革命・科学革命・市民社会・国民国家とナショナリズムの成立などの、特殊西欧的ワンセットの諸変化は、機能分化的な近代社会を作り出すに至った。⁹⁾西欧近代社会とその諸原理は人間と自然、個人と社会、精神と身体の間を二元的に分割して取り扱う人間中心のプログラムによって定向進化を加速化し、20世紀末の今日、地球生態系そのものを破壊するに至っている。

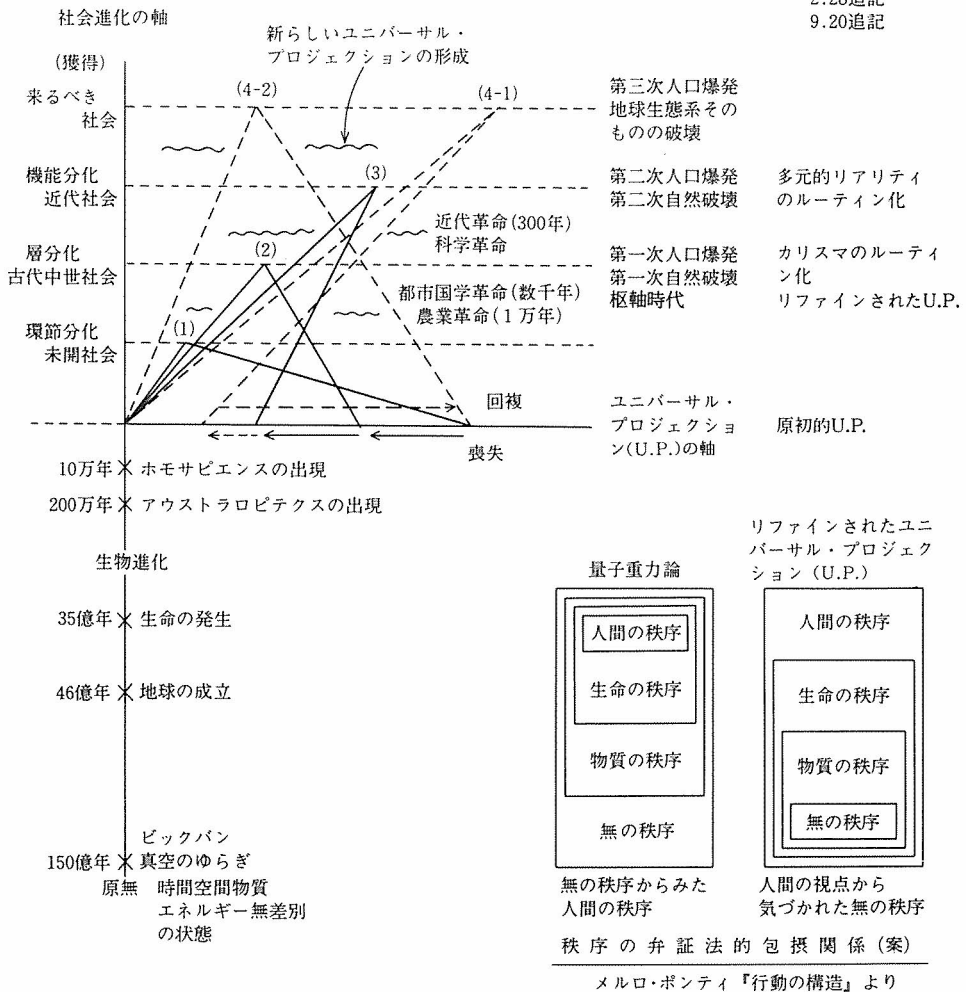
以上のプロセスを一つの図式にまとめようとする筆者の試みが、第一図「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典(案)」である。図におけるタテ軸(進化の軸)、は150億年前の真空のゆらぎによる宇宙の生成・地球の成立・生命の発生と生物進化・ホモサピエンスの出現と、環節分化社会・層分化社会・機能分化社会という段階をたどる社会進化の過程を、一つの時間軸で表現している。図では真空のゆらぎから、ホモサピエンスの出現までと、その後の社会進化の線の長さがほぼ等しいが、正確な縮尺にすると、ホモサピエンス以下の線は、それより上の線の長さの約15億倍に作図しなければならないのである。

ヨコ軸に取っている、ユニバーサル・プロジェクション(U.P.)とは、もともと、1970年に、T・ルックマンが「社会的世界の境界について」と題する論文の中で初めて用いた概念であった。¹⁰⁾この論文でルックマンはフッサール、シュッツに直接つらなる現象学的生活世界論の文脈において、生活世界の拡がりの中にどのように「社会的世界」が位置づけられるかについての、時代差や文化差を検討した。その時に、未開社会や子供の思考に共通する世界観を要約して表現するために「U.P.」という概念を用いたのが最初の用例である。

そこでは「U.P.」は、多くの未開社会や子供の思考に見られる「前論理的心性(レヴィ・ブルルール)」「世界全体を社会的宇宙として取り扱う思考様式としての「トーテミズム(レヴィストロス)」「外的世界の生命的把握(ゲーレン)」「外的世界への感情移入(テンブルック)」「人格的統覚(ヴント)」「生命化された宇宙観の系統発生的先行性(シェーラー)」などという形で多くの人類学者、民族学者、心理学者、哲学的人間論の論者が論じている諸概念を要約するものとして定義されている。

筆者は、このようなルックマンの「U.P.」の規定を、より明確化し、人間の経験可能性の

1993. 1. 6Y.Y
2.28追記
9.20追記



第一図 ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典(案)
宮沢賢治『銀河鉄道の夜』より

全体にまで視野を拡大しても使用可能な概念とするために、以下のように再定義を行った。それは「U.P.とは人間と自然、個人と社会(共同体)、精神(主観)と身体(客観)の間を二元論的に実体化して分割するのではなく、それらを一体連続として把握する体験様式、思考様式である¹¹⁾」というものである。

このように再定義すると「U.P.」は何もルックマンが規定したような、未開社会の原始心性や子供の未成熟な物活論的思考様式などの、西欧近代の合理的世界観からすると、非合理で未開幼稚なものとして貶められるような思考、体験様式のみ限定されるべきではない。筆者

はそれらを、「原初的 U.P.」と名づけ、より洗練され高度化された思考様式・体験様式としての、「リファインされた U.P.」と区別すべきであるとする。

以下、U.P. の種々相について説明する。¹²⁾

(1) 原初的 U.P.

人間と自然、個人と共同体、精神と身体を一体連続として経験する様式は、未開社会の素朴文化段階において最も顕著に見られ、それは生活のすべての分野をおおっている。アニミズムやトーテミズムの世界観においては、自然と人間が一体連続であり、自然界の動植物や山や川や海や太陽や月や風や雷などなどは、人間と同じような生命と精霊やところをもっている。そこではそれらの自然存在は人間に対して圧倒的な力をもつものであり、畏敬すべきものであるから自然を人間の観点から支配、管理するという「人間中心的世界観」は成り立たない。自然は人間に対して恩恵を与えたり、災いを与えたりするので、人間は自然に対して、崇拜したり、力を与えてもらったり、怒りをなだめたりするために、さまざまな儀礼や呪術やタブー（禁忌）を通して関わりをもつ。

例えば、オームを自らの部族のトーテム（神聖動物）としている部族社会のメンバーが誤ってオームを殺すと、彼は最大のタブーを犯したことになる。彼は次第に元気がなくなりふさぎ込み、やがて死ぬ。タブーを破った者は死ぬと、部族のみんなも本人も信じているからで、そこには個人の主観性と共同体の相互主観性の間に緊密な一致がみられる。社会学的に言うと、これは典型的な、予言の自己成就のケースであり、このようなことは、近代社会においても、「共通の信念を強く持っているカルト集団」などにおいて起る。共通の神話や信念を確呼として持っている人々の間では、それが「現実^{リアル}」であり、人々は現実を自分たちの神話に従って解釈し、そのように解釈されたことは現実となる。

そこでは、人間と自然、個人と共同体、精神と身体の関係が、部族のトーテムについての神話的共通信念によって緊密に統合されている（多元的リアリティの未分化的・神話的統合）。だから個人の一つの行為（オームを誤って殺した）は、その神話的枠組によって解釈され、説明され、本人と部族のメンバーの共通の信念に従って、その行為の必然的な結果（死）へと推移していくのである。

近代科学的な世界観からみると、このような現象は非合理的な迷信に思えるが、そこで生きている人々にとってはそれが「現実」であり、「自明のこと」であり、「納得させられる現象」なのである。そして彼らは完結した神話的世界観の中で、自然と調和共存し、個人と共同体、精神と身体の分裂を経験せず、信念と尊厳に充ちた生き死にを行う。その点において、近代的エゴが持つような疑惑や自己疎外や孤独感から免れている。それは、それらすべての分裂に悩まされている、我々近代人の生を反省する手がかりとなる。

筆者はこのような未開社会に典型的に見られる「U.P.」を「原初的な U.P.」と名づける。その第一の特徴は、そこで共有されている神話体系が小さな部族、あるいは部族連合の範囲を超えて、他の部族にも通用するような普遍性をもたないことである。別の神話や信念体系をもつ他の部族とは、その信念体系の違いの故に、緊張や敵対関係をもちうることになる。第二の特徴は、自然と人間を一体連続として体験する信念体系と、狩猟採取の生活形態と、人口規模の小ささのために、彼らが生きる自然生態系と調和した生活が行われ、大きな自然破壊を引き起こさないということである。

(2) 原初的な U.P. のもう一つの形態としての子供の体験様式

子供の思考様式、体験様式はピアジェの発生的認識論¹³⁾のような立場からは、大人のもつ抽象的知能操作（合理的で論理的な思考形式）に至るまでの、自己中心的で、非合理で、前論理的な未熟な精神の状態と位置づけられる。童話やファンタジーに典型的に現われるように、子供にとっては、人間以外の自然がところを持っていたり、人間に語りかけたりするのはごくあたりまえなことである。人間の歴史は、子供時代を、一方では、大人の精神に至るまでの不完全で未熟な段階と位置づけるが、他方で、無我で純真でより神に近い存在、と位置づける両極性を示してきた。

子供の思考の中には、人間と自然、個人と社会（自分と親）、精神と身体を一体連続としてとらえる体験様式が見られるから、筆者はそれを、未開社会における「原初的な U.P.」と区別して、「子供の思考に見られる U.P.」と位置づける。未開社会の子どもも、近代社会の子どもも「社会化のプロセス」を通して、その社会に共有されている思惟、感得、行動の様式を身につけ、その社会の一人前の大人のメンバーとなる。

近代人の大人は、人間と自然、個人と社会、精神と身体を二元的に分割して取り扱うことを自明としているが、自らの子供時代はそうでなかったことを、「自覚の後至性の体験」¹⁴⁾によって体験し直すべきである。「近代人の大人は、時間泥棒に生きた時間を売り渡してしまって、あくせくと合理的損得計算によって利潤を最大化することに駆りたてられる、貧しい生を送っている人たちであり、真に生きた時間を大人たちに取りもどしてやる力をもっているのは子供たちである」という、エンデの童話『モモ』¹⁵⁾の中に説得的に語られているメッセージを大人たちは受けとり直すべき時に来ていると思われる。『自由をこどもに』¹⁶⁾の中で松田道雄が述べているように、近代社会は大人の論理によって子供を管理し、子供の体験様式の中に最も生き生きと表現されるはずの「生きた時間との関わり」を圧殺することによって、大人自身が自らの生を貧しいものにする方向につき進み続けているのである。

このことは、後述するように、宮沢賢治の表現形式が、近代社会の論理にどっぷりとつかり込んだ大人のエゴのリアリティを描く、「近代小説」の形式ではなく、心象スケッチと名づけ

られた独自の「詩」やイーハトーブの名を冠した「童話」の形式を取らざるを得なかったことと深く関わっている。

(3) リファインされた U. P. とカリスマ¹⁷⁾のルーティン化

狩猟採取の未開社会の段階から、農業革命、都市国家革命をへて、古代的文明社会が成立することによって、「原初的 U. P.」は大きな変化をこうむる。ここで起ることは、人間と自然、個人と社会、精神と身体的第一的な分裂の現象である。

人間と自然との関わりにおいては、古代都市国家文明は、必ず第一次人口爆発と、森林破壊を中心とする、生態系の破壊を引き起こす。個人と社会との関わりにおいては、支配者と被支配者、富者と貧者、知識を独占する者と持たない者、といった、身分階級やカースト差別を引き起こす。社会的分業は層的に分化された、身分集団やカースト集団に配当される。社会圏の拡大と共に、異民族との戦争による大量殺戮や異民族支配が始まる。精神と身体の間においては、支配者の精神と身体、被支配者の精神と身体という分割が生み出され、さらにそれは、それぞれの身分階級に属する人間の精神と身体との分裂を引き起こす。

このような分裂を解決するために、身分やカーストの制度化や古代的官僚制の整備や中央と地方の統治機構が作り出されるが、それらを正当化するための、より大きな、包括的な神話体系が整備されねばならない。世界の四大河川文明は、それぞれ独自の古代帝國的な神話体系を作りあげるに至るが、それで根本的に前に述べた分裂が解決されるわけではない。

そこで BC 7 世紀から AD 1 世紀にかけて、古代都市国家文明のもたらした諸分裂を、より根本的にトータルに解決しようとする精神的な試みを行う、卓越したカリスマ的人格たちが同時多発的に出現する。この世界史的な時期をヤスパースは「枢軸時代」とよんでいる。それは、ギリシアにおけるソフィストたちやソフラテス、ユダヤにおける預言者たちやイエス、インドにおける古代哲学者たちやブッダ、中国における諸子百家や孔孟老荘などの哲学者や宗教家たちの輩出の時代である。

文化的な伝統の差異があるが、彼らカリスマたちの生き方と言説は、いずれも既存の神話体系がもつ、身分階級や民族の差別を越えて、人間と自然、個人と社会、精神と身体の間での分裂を統合しようとする、新しいより普遍的な精神的原理による生き方の実現と、そのより洗練された言語的表現であった。枢軸時代に出現したこれらの卓越した人格たちの共通のメッセージは「人間のエゴの傲慢とその逆の卑屈を捨てよ。人間がその一部である自然との関わり、他者との関わりにおいて連帯と和解を達成せよ。頭で頭を、言葉で言葉を求める追究のし方を止めよ。心身の二元的分裂を止めて、生きものたちから、子供たちから学び、生態系の中で共に生きよ。死を恐れるな後世をたのむな。ここ、いまにトータルに生きて各自の生を充実させよ。」ということにある。

「一切衆生悉有仏性、天地万物一体同根、空の鳥を見よ、播かず蒔らず倉に収めず、無知の知が最高の知である」、などの言葉は、素朴文化段階から文明段階に突入した人類の矛盾と疎外を解決するための、「リファインされた U.P.」の表明であると言える。

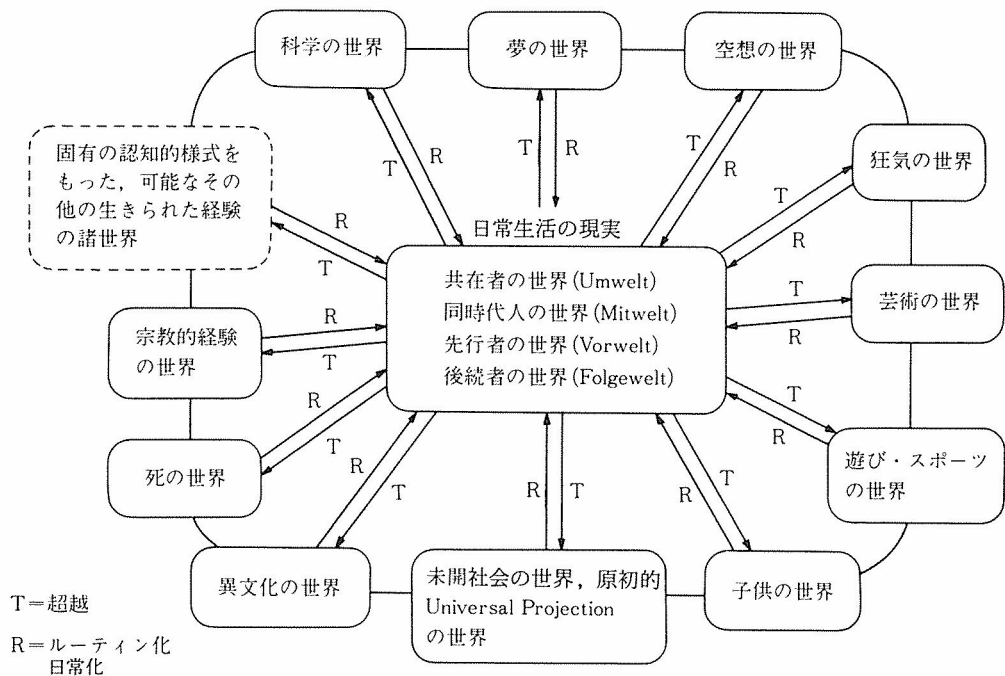
しかし次に起こったことは、卓越したカリスマ的人格たちの言説の権力者たちによる世俗化、ルーティン化¹⁸⁾、既成政治経済体制への合理化、自己正当化であった。古代ローマ及び西欧世界がキリスト教を、漢代以降の中国が儒教を、古代インド諸王が仏教を、時代は降るがモスLEM世界がイスラム教を、正当権威化し、体制宗教化したことがそれである。

カリスマのルーティン化によって「リファインされた U.P.」が世俗化され、日常化され制度化されると、社会秩序が相対的に安定し、一定の範囲で人間社会と自然生態系との間にバランスが成立する。前近代的な諸文明が地球上に相対的な自律性をもって並存したり、興亡をくりかえす時期を迎える。そこでは変形された「原初的 U.P.」と「世俗化された体制宗教のもつ U.P.」とが、U.P.のあり方の主流となり、時々、あるいは持続的に、本来のカリスマの提示した「リファインされた U.P.」が追求されたり、それへの復帰運動が宗教改革を引きおこしたり、教派やセクト集団の分立をうながしたり、新しい教祖による新しい宗教が形成されたりする。この段階は、多元的リアリティの分化と統合の観点からすると、「カリスマのルーティン化にもとづく、神学的形而上学的説明体系における多元的リアリティの相対的に層化された分化と統合」と性格づけられる。

(4) 近代社会における U.P. —— 多元的リアリティのルーティン化¹⁹⁾ ——

近代社会を自前で作りあげたのは約 300 年前以降の西欧社会のみであった。それは①知的枠組においては科学的世界観とその技術的応用が、②経済的枠組においては資本主義的市場経済が、③社会的政治的枠組においては共同体から自由になった個人が、各々の利害関心にもとづいて契約によって結合する利益集団（ゲゼルシャフト）の集合体としての市民社会と国民国家が、④社会的分業の枠組においては、専門職業化された機能的分業が、支配的原理となるに至った社会である。西欧の近代化は、第二次の人口爆発と自然破壊をヨーロッパにもたらした。が、西欧の近代化した国民国家群は非西欧世界の植民地化によってその問題を乗り越えた。20 世紀の二次にわたる世界大戦は、資本主義化した国民国家間の帝国主義的覇権闘争の結果だった。

1945 年の第二次大戦の終結から 1991 年のソ連邦の解体までは、資本主義陣営と社会主義陣営の東西冷戦体制と 60 年代から次々に独立した南の旧植民地国と、近代化をなしとげた北の国々との間の矛盾である南北格差問題が世界の主要な問題の枠組となった。その間世界全体の近代社会化への動向は、南の国々の第三次人口爆発と、地球規模の生態系の破壊を生み出しつつある。91 年のソ連邦の解体によって東西冷戦体制がくずれ、世界に平和がもたらせられると期待されたが、冷戦体制によっておさえつけられていた、世界各地での民族紛争が激化する



第二図 人間によって生きられる経験可能性の全体としての生活世界

ようになった。

21 世紀を目の前にした我々宇宙船地球号の住人は、今や、宇宙と地球の歴史の時空の拡がりの中で自らのあり方を見直さねばならない時期にきている。このような反省が筆者に第一図「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典（案）」を構想させ、将来の人類社会の二つの可能性としての、「U. P. のますますの喪失と科学技術や経済のますますの進化」によって特徴づけられる三角形（4-1）のような社会と、「U. P. の回復と新しい U. P. の形成と社会進化の進行が統合されるに至る」、三角形（4-2）のような社会を提示するに至らせたのである。

第二図は、多元的リアリティが、それぞれの専門家と専門施設や制度と、専門メディアによって、機能的分業の形になわれている、近代社会の日常生活と多元的リアリティのルーティン化の状況を示している。

図の中心に位置づけられている日常生活の現実とは、共同体から分離した近代的個人が、私有権を持ち、自らの財と能力を資本主義的市場原理の中で自由に運用することによって、より豊かな、上層の生活を獲得しようと競争している現実である。日常生活の基本的な分野を支配している知的枠組は科学的知識とその応用であり、近代人の日常生活は、フッサールの「科学以前及び科学以外のに生きられている世界」という生活世界の規定に対応させると「科学の成立

以後、科学と共に生きている生活世界」と特性づけられる。したがって第二図においては、日常生活の現実と科学的思考の世界は「U.P.」が限りなくゼロに近い生活分野であることになる。

近代人によって「U.P.」が経験されるのは、その他の多元的リアリティの諸領域である。しかもそれは「科学的世界観を支配的な原理とする、近代的な日常生活の現実にアクセントを置いた、多元的リアリティのルーティン化」という形態をとる。図の中に列挙されている多元的リアリティは、日常生活の現実から一時的に移行（超越）することによって、日常とは異なった経験をしたり、気ばらしをしたり、逃避したりするが、またすぐ日常にもどらなければならない飛び地、あるいは一時的な仮の現実には過ぎない。

例えばある宗教の信者が礼拝や宗教行事の時には一時的に、愛とか救いとかの聖なるリアリティを経験するが、日常の職業生活の中では、それと矛盾するような、弱者をけ落す競争原理やあくなき利潤追求の原理にたちもどる、といった現象に典型的に見られる。このような形の宗教行事への参加は、彼の日常的現実を何ら変化させることにはならないのである。

しかし例えば、ある人が音楽のコンサートに行って、深く全身的に音楽の世界に没頭して、日常的なエゴの壁が溶解し、音楽と我、我と他者、²⁰⁾ 我の心と体が一体連続として体験されるような「真正の深いリアリティの体験」をするというようなことも起りうる。この場合には、「音楽のリアリティの中で実現されるより深いU.P.」を体験していることになる。そのような深い体験のあと、日常生活の現実にもどると、それが以前とは異なって異和感をもって感じられる「異化体験」が起こる。

めったに起こらないが、このような日常にもどった時に異化体験をとまなうような「深いU.P.」の体験は、夢の世界、演劇の世界、さまざまな芸術の世界、スポーツの世界、異文化との接触の世界、宗教の世界などにおいても起こりうる。近代生活の中での多元的リアリティの経験は、このように、大部分がそれである「ルーティン化された表層的なU.P.」の経験と、希にしか起らない「より全人格的で深いU.P.」の体験に区別されねばならない。より深いU.P.の体験は、日常生活の現実を変革する端初となりうる。

サラリーマンが酔っぱらってカラオケの演歌を歌い自己陶醉を味う時、若者たちが人気バンドのロックコンサートで体をゆすり、足ぶみし、リズムに同調してみんなでノル時、ゲーム機やパチンコに一時我を忘れて集中する時、酒やドラッグで一時的な陶醉を得る時、スポーツの試合に熱中する時、要するに日常生活の現実を一時的に忘れることのできる、多元的リアリティのいろいろは、それぞれ固有の「ルーティン化された表層的なU.P.」を我々に経験させてくれる。近代人はそれを専門家や専門施設から金で買い、消費し続けているが、それは我々を真に成長させはしないし、我々の近代化された日常生活の現実を変革するものとはならないのである。

今のところ近代社会は大勢において第一図の三角形（4-1）に示したように、人間と自然、個人と社会、精神と身体の二元論的分裂を拡大する方向に定向進化し続けている。新しい「U.P.」の形成へと向うためには、地球史、人類史を見通す巨視的な視野と、日常生活の中における我々の、自然や他者や身体との具体的な分裂の諸相を、しっかりと見つめ直す繊細な感性を獲得しなければならない時機に來ているのである。

このような「新しいU.P.」の形成への試みを印象深くイメージさせるものとして、筆者は宮沢賢治の四次元芸術の思想に強く引きつけられ、絶えざるインスピレーションをそこから受けてきたのである。

第二章 『銀河鉄道の夜』—— 賢治自身の述べる「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典」——

童話『銀河鉄道の夜』は、父が行方不明で、病身の母と暮している貧しい少年ジョバンニが、夢の中で親友カムパネルラと銀河鉄道を旅する物語りである。ジョバンニが天気輪の柱の立つ丘でこの夢を見ていたその時、実はカムパネルラは川で溺れそうになった友達を助けて自らは水死していたのであり、それと知らずにジョバンニは夢の中でカムパネルラと出会い、共に銀河鉄道を旅するのである。

この物語にはこのように「大切な人の死」というテーマが通奏底音のようにひびいている。列車の中に、タイタニック号の遭難による水死者とおぼしい、家庭教師の青年と姉と弟の子供が乗り込んできて、二人と話をし、やがてサザンクロス²¹⁾の駅で下りてそこから天国へ行くというエピソードが語られたりもする。

しかしこの物語の最大のテーマは、この旅を通して、ジョバンニが「すべての人間がまことの幸福を得ることができる道をさがそうとして、愛する者の喪失（旅の終りころにカムパネルラは突然消えてしまう）あるいは死をのりこえて、まっすぐに歩み出す決意をするという点にある。

この物語において主人公ジョバンニはブルカニロ博士に、銀河鉄道の夢の中（夢①）とそれに続く、天気輪の柱の丘の上に立っている夢の中（夢②）の二つの夢の中で出会っていることになる。が、ブルカニロ博士は目覚めた現実の中の人物ではない。ジョバンニが賢治の人生を象徴する分身であるのに対して、ブルカニロ博士は賢治の思想的、認識論的分身であるといえる。

博士は少年ジョバンニに「遠くから私の考えを人に伝える実験」をする人物として描かれているが、賢治の詩や童話などのすべての作品はその意味では『ブルカニロ博士の「遠くから私の考えを人に伝える実験」』であると考えることができよう。ジョバンニは「夢②」の中のブルカニロ博士の上記の実験によって「夢①」の中で銀河鉄道の旅をしたのである。

天の川にそって北から南へ走る銀河鉄道に乗って、いろいろな風景や出来事や人物との出合

いを経験した旅の終りころに、ジョバンニとカムパネルラは、「僕もうあんな大きな暗の中だってこはくない。きっとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く。どこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」「ああきつと行くよ。」という対話をする。ジョバンニが賢治の分身であるならば、ここではカムパネルラは賢治と信仰を同じくし、最も信頼し理解し合っていた最愛の肉親、若くしてすでに死んでしまった妹トシの分身である。

物語りの中では、ここで「カムパネルラの形」は見えなくなり、その席には「ただ黒いびろうどばかりひかって」いた。そこで、「ジョバンニは鉄砲丸のように立ちあがり」……「力いっぱいげしく胸をうって叫び、それからもう咽喉いっぱい泣きだ」す。このくだりは、全く、妹トシの臨終の情景をうたった、「永訣の朝」や『校本全集 14 巻、年譜』²²⁾に記されたトシの死の瞬間の賢治の行動をそのまま思い出させる。

それからブルカニロ博士が登場し、ジョバンニは次のような対話を博士と交わすのである。

「おまへはいったい何を泣いているの。……」

「おまへのともだちがどこかへ行ったのだろう。あのひとはね、ほんたうにこんや遠くへ行ったのだ。おまへはもうカムパネルラをさがしてもむだだ。」

「ああ、どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行かうと云ったんです。」

「ああ、さうだ。みんながさう考へる。けれども一緒に行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまへがあふどんなひとでも、みんな何べんもおまへといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからおまへはさっき考へたやうに、あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、みんなと一しょに早くそこに行くがいい、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ。」

「ああぼくはきつとさうします。ぼくはどうしてそれをもとめたらいいでせう。」

「ああわたくしもそれをもとめてゐる。……………けれども、もしおまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考と、うその考とを分けてしまへば、その実験の方法さへきまれば、もう信仰も化学と同じやうになる。」²³⁾

そしてブルカニロ博士は地理と歴史の辞典を取り出して次のような説明をする。

「けれども、ね、ちょっとこの本をごらん、いいかい、これは地理と歴史の辞典だよ。この本の頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくごらん紀元前二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のころにみんなが考へてゐた地理と歴史といふものが書いてある。」

だからこの頁一つが一冊の地歴の本にあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本当だ。さがすと証拠もぞくぞく出てゐる。けれどもそれが少しどうかたと斯う考へだしてごらん、そら、それは次の頁だよ。

紀元前一千年。だいぶ、地理も歴史も変ってゐるだらう。このときは斯うなのだ。変な顔をしてはいけない。ぼくたちはぼくたちのからだだだって考えだって、天の川だって汽車だって歴史だって、たださう感じてゐるのなんだから、」²⁴⁾

これが賢治自身による「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典」の説明であるが、筆者は前掲の第一図を描いていた1993年1月6日に、このくだりを思い出し、読み直し、この図に何のためらいもなく「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典（案）」——宮沢賢治『銀河鉄道の夜』より——というタイトルをつけたのである。

賢治自身の上記の説明と、筆者の作製した第一図とが、根本的に同じ発想のものであることは、以下の諸点によって指摘できる。

(1) まず現象学的な認識論、リアリティ論と賢治の「よくごらん紀元二千二百年のことでないよ、紀元前二千二百年のころにみんなが考へていた地理と歴史だよ」という説明との共通性について述べたい。これは、時代や社会の差異によって、人間がその時々を持つ世界認識の徹底的な相対性の主張であり、「現実、あるいは事実の一つである」という実証的認識論、「客観なるものが主観を離れてそれ自体として存在し、それを科学は認識できる」という客観主義的科学観に対する批判である。「紀元二千二百年のことでないよ」と賢治が言っているのは、まさにこのような客観主義、実証主義が自明としている「紀元二千二百年のこと」なのである。

これは歴史認識においては、その時の「主体によって生きられ、体験され、考えられた現在」に如何にアプローチできるかという問題であり、ミッシェル・フーコーの『狂気の歴史』『臨床医学の誕生』『監獄の誕生』などの作品や、日本でも西欧でも最近注目されるようになった、綱野善彦や阿部謹也の中世史の研究やアーナル派の業績、司馬遼太郎の歴史小説の手法の中で試みられているものである。²⁵⁾

社会学においては、実証主義や構造機能主義社会学に対する、現象学的社会学やエスノメソドロジー、象徴的相互作用論の立場がこれにあたり、文化人類学の分野では、単なる参与観察ではなく、そこに生きている人々の視点や体験に即して、現実記述をしようとする、試みや、生活史的アプローチがこの方向の考え方である。

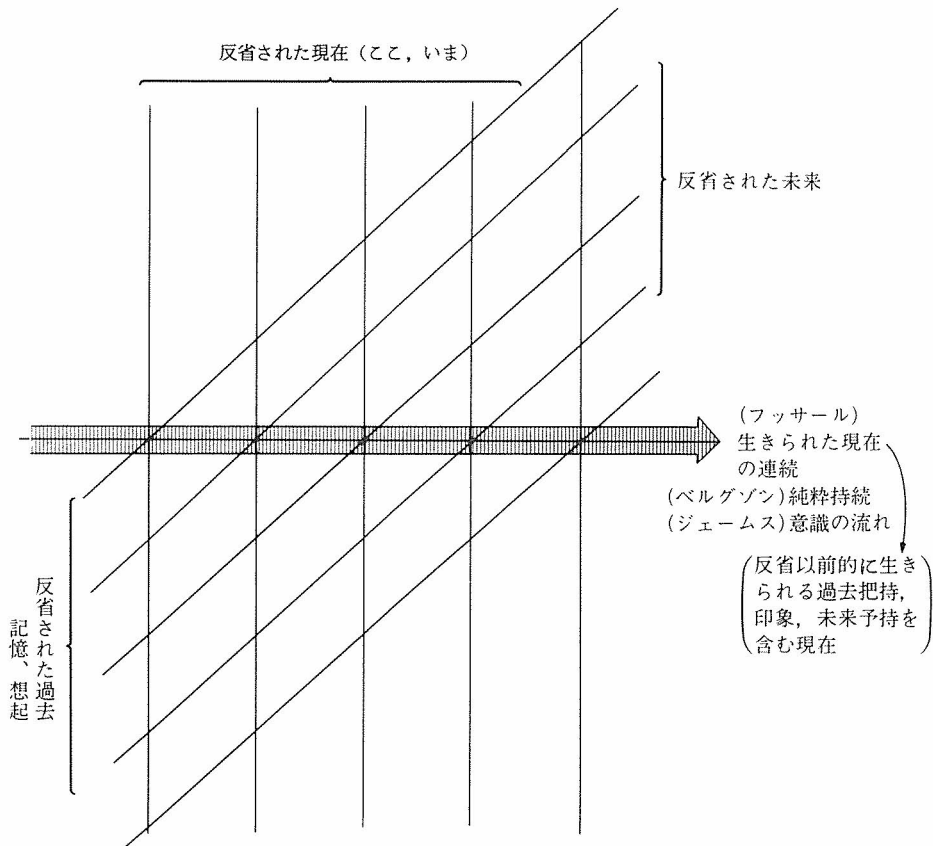
この方向は何も人文科学、社会科学のみに言えるのではなく天動説から地動説へ、ニュートン物理学から、相対性理論、量子力学をへて、量子重力論へという物理学におけるパラダイム革命についても言えるのである。

宗教体験の分野では、「歴史上のイエス」をどうとらえるかについて、まさにエンドレスな

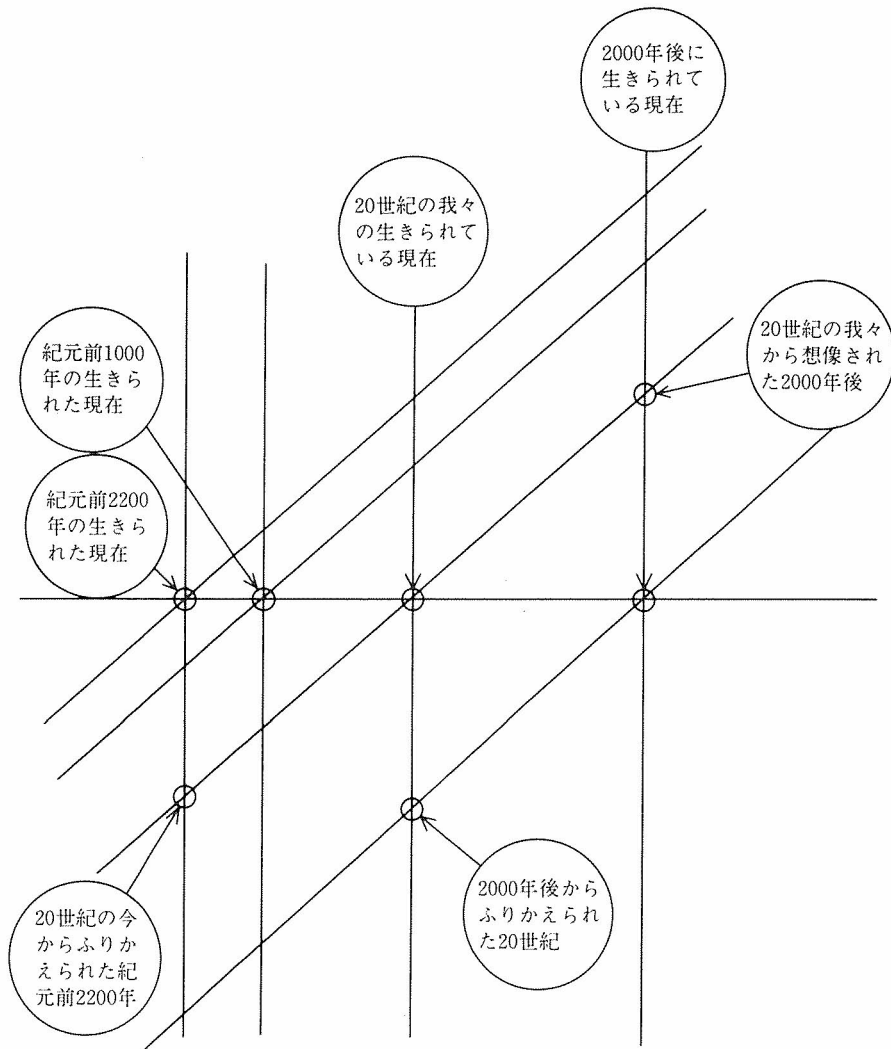
解釈学的循環としか言いようのない論争がくりかえされてきている。それは一方で、「不立文字」に立つはずの禅が、「ことばで語りえないと定義している見性の体験について」おびたらしい語録や公案集や文献を産み出し続けてきた事情とも関わりをもっている。

賢治は信仰と科学と芸術と日常生活をトータルに総合する方法について生涯考え続け、実践にふみ込み、挫折を経験し病いを得て、しかもなお死に至るまで考え続け、書き続けた。筆者は、最近、量子重力論の真空あるいは無のゆらぎによって宇宙が成立したという理論を知って、大変ゆ快を感じた。禅の文献にしばらく沈潜していた筆者にとって、量子重力論の無の概念が「時間・空間・物質・エネルギーの区別のない状態」と定義されていることを知ったとき、それは勿論同一のものではないが禅の無の体験と大変似ていると直観した。もし賢治がそれを知ったら、「ホウホウ」と身をのり出してしゃべり出すだろうと思った。²⁶⁾

「ぼくたちはぼくたちのからだだって考だって、天の川だって汽車だって歴史だって、たださう感じてゐるのなんだから」。だから筆者の作った「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典



第三図 生きられた時間と反省された時間の構造



第四図 「ブルカニロ博士の説明」と「春と修羅 序」述べられている時間の相対性

(案)」も、1993年の段階で参照できる諸科学の成果を私なりにまとめると、こういうことになるのではないかと、「かんじている」のに過ぎないのである。

(2) 時間の相対性についての賢治の記述と、現象学的な生きられた時間意識の構造についての考え方の類似。

第三図は、フッサールの『内的時間意識の現象学』とメルロ・ポンティの『知覚の現象学』の中に描かれていた、時間意識の構造図を、筆者が補足して作りあげたものである。紙幅の関係でこの説明は一切はぶくので拙著²⁷⁾を参照して頂きたい。

第四図は、「ブルカニロ博士の説明」と「春と修羅 序」に述べられている賢治の時間の相対性についての言及を第三図をモデルにして図示したものである。

「紀元前二千二百年のこと」と賢治が言っているのが、図の「20世紀の今からふりかえられた紀元2200年のことであり、「紀元前二千二百年ころにみんなが考へていた地理と歴史だよ」と述べているのが、図の「紀元前2200年の生きられた現在」にあたる。また「春と修羅 序」の46～56行の「おそらくはこれから二千年もたったころは」というのが図の「20世紀の我々から想像された2000年後であり、「みんなは二千年ぐらい前には」と述べているのが図の「2000年後に生きられている現在」の時点から「ふりかえられた20世紀」となる。

(3) さらに引用した「銀河鉄道の夜」の「ああ、さうだ。……そしてみんながカムパネルラだ。おまへがあふどんなひとでも、みんな何べんもおまへといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。……そこでばかりおまへはほんたうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ。」というカ所は、「春と修羅 序」の24～25行の（すべてがわたくしの中のみんなであるやうに、みんなのおおののなかのすべてですから）という思想に通底し、それは筆者が先に述べた「リファインされたU.P.」の体験様式、思考様式と同一であることを最後に指摘しておきたい。

第三章 「春と修羅 序」に表現された思想と「U.P.」

まず「春と修羅 序」の全文60行を以下に引用する。あとでコメントする時にわかりやすいように、5行毎に行ナンバーを各行の下に記しておく。行と行の間があげられていても行ナンバーはそれに関知せず、印刷された行の順番を示している。

序

1

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

5

風景やみんなといっしょに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

10

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
紙と鉋質インクをつらね
(すべてわたくしと明滅し
みんなが同時に感ずるもの)

15

ここまでのもちつゞけられた
かげとひかりのひとくさりづつ
そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海胆は
宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら
それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが
それらも畢竟こゝろのひとつの風物です
たゞたしかに記録されたこれらのけしきは
記録されたそのとほりのこのけしきで
それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで
ある程度まではみんなに共通いたします
(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに
みんなのおのおののなかのすべてですから)

20

25

けれどもこれら新世代沖積世の
巨大に明るい時間の集積のなかで
正しくうつされた筈のこれらのことばが
わづかその一点にも均しい明暗のうちに
(あるひは修羅の十億年)

30

すではやくもその組立や質を変じ
しかもわたくしも印刷者も
それを変らないとして感ずることは
傾向としてはあり得ます

35

けだしわれわれがわれわれの感官や
風景や人物をかんずるやうに 40
そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに
記録や歴史 あるひは地史といふものも
そのいろいろの^{デューク}論料といっしょに
(因果の時空的制約のもとに)
われわれがかんじてゐるのに過ぎません 45
おそらくこれから二千年もたったころは
それ相当のちがった地質学が流用され
相当した証拠もまた次次過去から現出し
みんなは二千年ぐらゐ前には
青ぞらいっぱい無色な孔雀が居たとおもひ 50
新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層
きらびやかな氷室素のあたりから
すてきな化石を発掘したり
あるひは白亜紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を 55
発見するかもしれません

すべてこれらの命題は
心象や時間それ自身の性質として
第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日

宮 澤 賢 治

60

タイトルを入れて全部で60行にわたるこの序は、賢治の構想する全く新しい四次元芸術の高らかで自信にみちた最初の宣言文である。

2～11行までは、この宣言の主体である「わたくしといふ現象」を「仮定された有機交流電灯、因果交流電灯のひとつの青い照明です²⁸⁾」と定義する、自己定義の表明である。

このように定義された「わたくしといふ現象」は、デカルト以来西欧近代科学の枠組となってきた、延長する実体としての身体や物質（客観）と二元論的に峻別された、思考する実体としての精神（主観）ではない。また共同体から独立して、自らの利害関心を中心として、契約

的な社会関係をつくり出す西欧近代の個人主体でもないし、神の被造物である自然を、神に代って支配管理するために、神に似せて造られた自然の支配者としての人間主体でもない。

その瞳目すべき賢治の個性は明白であるが、エゴとしての個性の表現を第一義とする、近代西欧的な個性の人格の表現主体、あるいは個性的芸術創造の主体でもない。

フッサールは、デカルト以来の主観—客観の二元論的枠組を何とか克服しようとして、意識に現われる限りの現象を、ノエシス（志向作用）、ノエマ（志向対象）の対応関係の現象学的記述分析によって解明する超越論的現象学を構築しようとした。

しかし賢治の「わたくしといふ現象」という自己定義は、フッサールの超越論的自己意識をも軽々と超えてしまっている。それは「わたくしといふ現象」をもう一步後退して、認識対象としてとらえるような反省的主観ではない。私は端的に「わたくしといふ現象」なのである。デカルト的コギトとしての反省的精神主体という、西欧的な「わたくし」の規定は、抜きがたい粘着力で、西欧近代の知的営みのすべてを規定してきたし、今も規定し続けている。

はっきり言うと、賢治の「わたくしといふ現象」という自己定義は、直接的に大乘仏教の人間観、自己観にもとづいている。仏教思想においては、「実体としてのエゴが在る」と考えることこそが最大の妄想なのである。（遠離一切転倒夢想、『般若心経』）

「有機交流電灯、因果交流電灯のひとつの青い照明です」という表現は、メターファーである。有機はすべての生命との連帯を、因果は、自然科学的原因結果関係を超えた、仏教的善因善果、悪因悪果の考えや、禅の不昧因果を、交流電灯は、一方向的な原因結果の関係でなく、「風景やみんなといっしょに関わりつつ生きている」弁証法的相互規定関係を表現している。

「ひとつの青い照明」の「照明」は限りある人間としての賢治のいのちを示しており、それは、みんなのまことのしあわせを求めようとしながら、親や社会を初めとするあらゆる障害にさまたげられ、悩み苦しみ怒り悲しんでいる修羅のいのちであるゆえに青い（Blue＝ゆうつ、苦しみ、悲しみを示す）のである。

その修羅の思いは、その時々に移り変わる実体のない現象としての賢治の「心象」であるゆえに（あらゆる透明な幽霊の複合体）なのである。ひとは常に、千のこと万のことを思うころを持っているが、ころは、ころころ変わるからころであり、ころには実体がないのである。しかし、いずれ限りあるいのちとしての賢治の（電灯は失はれ）ることは確実であるが、賢治自身もその一部である宇宙をつつむ大きないのちの（ひかりはたま²⁹⁾ち）続けられる。そう信じている修羅が「わたくしといふ現象」である。

この「序」の中には「修羅」としての自己定義はない。しかし詩集全体の表題を『春と修羅』としていること、（mental sketch modified）と注記されている、同名の心象スケッチの中に「いかりののがさまた青さ 四月の気層のひかりの底を 唾^{つばき}し はぎしりゆききする おれはひとりの修羅なのだ」とはっきり自己定義している。修羅とは「阿修羅の略。衆生が業によ

りおもむくとされる六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）の一。またこの六つの迷いの世界に四つの悟りの世界（声聞・縁覚・菩薩・仏）を加えた十界の一つでもある。……賢治における修羅を考察する場合忘れてならないのが、天台教学や日蓮教学で説く悉皆成仏、十界互具思想である。「人間世界の修羅の成仏」が賢治の根本命題である。……まず基本的に賢治における「修羅」の実体を三種に分類すると①意識としての主観的な修羅（内発するデモニッシュなエネルギー）、②時空間より見た認識的な修羅（信仰を科学的・哲学的・心理学的に裏付けようとしたもの）、③教学的に見た客観的な修羅（天台教学・日蓮教学から見たもの）となる。³⁰⁾と説明されている。

（ ）でくくられた文章が、(5)(11)(15, 16)(28, 29)(34)(44)の各行に出てくるが、これらは本文に対する、認識論的及び存在論的注記とでも言うべき性質をもっている。

12～19行までの記述は、ここに提示する文章群が、従来の概念における詩作品と理解すべきではなく、賢治が「心象スケッチ」と定義する独自の形式のものであることを表明している。

これらは、署名の日付、大正13年1月20日からすると22カ月以前（大正11年1～3月）から、「紙と鉛質インキをつらね」て書き続けられた、「そのとほりの心象スケッチ」である。そしてそれは（すべてわたくしと明滅し みんなが同時に感ずるもの）である。この意味はよりはっきりと(28, 29)で語られる。心象スケッチは賢治個人という「わたくし」が「風景やみんなとせわしくせわしく明滅」するいのちの交流を行う中で書きつけたスケッチであるが、それは（みんなが同時に感ずるもの）でもある。「かげとひかりのひとくさりづつ」とは、22カ月の時間の中で賢治のいのちが出合った、世界との交流のエピソードであり、夜（かげ）と昼（ひかり）の時間の経過を示すと共に、共に交感するいのちのかげ（修羅の心）とひかり（かがやく春のいのち）をも示している。

20～29行においては、この独自の「心象スケッチ」という試みにおいて、記録された心象のできごと（けしき、こころのひとつの風物）が、人間のところにのみ関わるのではないことを、まず述べている。

「人や銀河や修羅や海胆」は、人間、宇宙、人間と畜生の間の存在としての修羅、ウニ（人間以外の生きもの一般の代表）をあげることによって、大乘仏教でいう「一切衆生」古代中国哲学でいう「天地万物」、ありとし、あらゆるもの、生きとし、生けるもののすべてを表現している。その宇宙の中のすべての存在が自分の心象スケッチについて「宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら それぞれ新鮮な本体論も考え」るだろうと賢治は思う。それらすべては、食べる、呼吸するという生命のメタファーでとらえられると共に、「本体論も考え」という精神のメタファーでとらえられている。ということは「それらすべては、いのち、精神としては無差別」のものとして、とらえられているのである。と共に、それら（人や銀河や修羅や海胆）が心象スケッチについて考える本体論も、「畢竟こころのひとつの風物です」と

言い切る。ここでは賢治はひとまず「三界唯心」の仏教的世界観に立っている。

「たゞたしかに記録されたこれらのけしき」を記録したのは、他ならぬ賢治自身であり、人も銀河も修羅も海胆もそれを記録したわけではないにもかかわらず、賢治は「記録されたこれらのけしきは、記録されたそのほとりのこのけしきで、それが虚無ならば虚無自身がこのほとりで、ある程度まではみんなに共通いたします」と断定する。このような断定は、人間と自然、個人と社会、精神と身体を二元論的に分割する思考にとっては、不条理以外の何ものでもない。

賢治はこの「不条理な宣言」、ピアジェならば幼児の「自己中心性の典型的な表現」と評するであろう宣言を、何の造作もなく軽々と saying のけた上、その理由を、（すべてがわたくしの中のみんなであるやうに みんなのおおののなかのすべてですから）という説明でかたずけてしまう。

（すべてがわたくしの中のみんなであるやうに みんなのおおののなかのすべてですから）とは一体何を言っているのか。仏教哲学ではこれは、華嚴經の「重々交映や事事無礙法界の考え方」や法華經の「十界互具」の思想を示している。主観であれ客観であれ、すべての実体化を否定する大乘仏教的な無の観点に立てば、一つの玉はすべての玉をお互いの中に映しあうのであるし、一つ一つの波は共に一つの海の現象形態であり、しかも波と波がぶつかってもお互いにさわりがない、地獄から仏に至る十界の一つ一つがさらに十界をそなえている、その十界の一切の衆生が成仏するという、弁証法的な相互内在、相互侵透の関係としてとらえられるのである。

筆者のことに翻訳すれば、これはまさに、「リファインされた U.P.」の賢治的表現であり、賢治は、人間と自然、個人と社会、精神と身体 of 宇宙的な一体連続感に立って、上記のようなことばを確言的に述べているのである。

「ある程度まではみんなに共通いたします」という保留は、それらの間にある非連続を容認していることを示している。彼は「怒りのにがさまた青さ おれはひとりの修羅なのだ」と言わざるを得ない現象の一相面をはっきり自覚した上で生きていた。現象としての彼の全人生は、父や親類や地域社会や農民や文壇などの社会との非連続によって阻止され、挫折することのくりかえしであった。

しかしこの「すべてがわたくしの中のみんなであるやうに みんなのおおののなかのすべてですから」という宣言は、彼の人生の悲願であり信念であり続けた。賢治はこのねがいに生き死んだのだといえる。

30～38行においては、心象スケッチという形で、その時々 of 心象の「けしき・風物」（もの・こと）を記録した「ことば」の相対性と不易性、時間の相対性について荘大な論述を行っている。賢治は自らの心象スケッチのことばによる記録の営みの時間的位置づけを日常的時間の尺度でも行っているが（60行の大正十三年一月廿日という日付）同時にそれを「新世代沖積世の 巨大に明るい時間の集積の中」という地球史的 time の中に位置づける。これは 39～

56 行の記述にも照応する時間の相対性の把握であり、「わずかその一点にも均しい明暗のうち」が、(あるひは修羅の十億年)という認識論的注記によって補足される。

そのような巨大な時間の視野の中では、その時々「正しくうつされた筈のこれらのことばが」「すではやくもその組立や質を変じ」という、ことばという現象の相対性が指摘され、「しかもわたくしも印刷者もそれを変らないとして感ずる」という、日常的尺度の中での恒常性が、ともに記述される。このくだりは「ことば」に対して賢治が生涯にわたって取った態度、自らの原稿を絶えず修正、加筆、推敲しながら、結局「その時々推敲をもって定稿とする」と書きつけた態度と照応する。「まことのことば」を求め続けた賢治は同時に「ことば」の空しさ、相対性を自覚していたのである。

39～45 行、と 46 行～56 行の二つのセンテンスは、第二章において「銀河鉄道の夜」から引用した部分と、筆者の提示した「ブルカニロ博士の地理と歴史の辞典(案)」に最も密接な関わりをもっている。

39～45 行の文章は「けだし……われわれがかんじてゐるのに過ぎません」という構文になっている。「けだしわれわれがわれわれの感官や 風景や人物をかんずるやうに」われわれが経験する現実、まずもって徹頭徹尾、主観的な現実である。と同時にそれは、「そしてただ共通に感ずるだけであるやうに」われわれの間で共通して感ずる相互主観的現実でもある。

主観をこえた客観的なものであると信じられている「記録や歴史 あるひは地史といふものも それのいろいろの論料^{チ-ク}といっしょに」(因果の時空的制約のもとに)「われわれが感じてゐるのに過ぎ」ないのである。

これは徹底した「現実の主観性、相互主観性」の主張であり、仏教思想では「三界唯心」の考えに相当する。しかしこの仏教的唯心論は、物心二元論の枠組の一方としての西欧的唯心論とは異なるものである。それは仏教的な「無」「空」が有に相対する、有の欠如態・否定態としての、なにもない意味での「無」ではなく、「有無」の相対的差別を超えた、一切を産み出す創造的かつ絶対的な無であり、人間の常識的な認識能力による「分別(分節)」をこえた「無分別・無差別」の「世界と一体連続の体験」であり、だからこそそれは同時に「すべての分別」を「分別として正しく成り立たせうる、エゴなしの分別³¹⁾」なのである。

この仏教的な「無」あるいは「空」の思考に親近するものは、エゴのわなの中から抜け出せない西欧近代哲学の中には非常に乏しく、意外に「量子重力論」が宇宙の始原に理論的に措定する「無」や「真空」の概念であることは驚きであった。

46～56 行の「おそらくはこれから二千年もたったころは……透明な人類の巨大な足跡を発見するかも知れません」の部分についての筆者の理解は、第二章で第四図を示してあるのでここでは重複しない。

57～59 行「すべてこれらの命題は 心象や時間それ自身の性質として 第四次延長のなか

で主張されます」という最後のセンテンスの「すべてこれらの命題」と言われているものは、第一義的には、この「序」の中に展開されている58行の文章を指しているが、拡大された意味でのそれらすべての命題は「心象や時間それ自身の性質として第四次延長のなかで主張される」賢治の全ての詩、全ての童話、全ての表現にまで拡大していくものなのである。第四次延長と賢治が命名する世界は、まさに、賢治という卓越した人格によって生きられ体験され、言語表現へともたらされる、「新しいリファインされたU.P.の世界」であり、そのようなU.P.にもとづいて、宗教・科学・芸術と日常生活の現実が高い統合へと成長させられていく、「多元的リアリティの統合の世界」なのである。

注

- 1) 矢谷慈國、『生活世界と多元的リアリティ』関学生協出版会、1989。(以下『拙著』と記す)、第4論文、pp.98～101、第5-1論文、pp.153～154。「宇宙、地球、人間」『追手門経済論集』、第27巻1号、1992。「新しいユニバーサル・プロジェクションの形成をめざして①②③④」、『コンステラティオン』No.276～279、1993年4月～7月号。「街角文化論④ 人間のみなさんへ、あるいは新しいユニバーサル・プロジェクションの回復について」、『コンステラティオン』No.274、1993年2月号
- 2) 『宮沢賢治全集』第2巻、第11巻、筑摩書房、1967
- 3) 『拙著』参照
- 4) 『拙著』、p.101
- 5) 『宮沢賢治全集』第10巻 筑摩書房、1967
- 6) 『ニュートン別冊 ブラックホール宇宙』1990、10月、p.19、p.27。拙稿前掲「宇宙、地球、人間」pp.214～215
- 7) 『拙著』pp.135～136。(Ⅲ) 環節分化的生活環境世界としての原始社会
- 8) 『拙著』pp.125～135。(Ⅱ) 層分化的生活環境世界としての古代・中世社会
- 9) 『拙著』pp.118～125。(Ⅰ) 機能分化的生活環境世界としての近代社会
- 10) Luckmann, T. "On the Boundaries of the Social World" in Natanson, M. ed., *Phenomenology and Social Reality*, The Hague, Martinus Nijhof, 1970
- 11) 『拙著』p.101., 拙稿「街角文化論④ 人間のみなさんへ」p.39
- 12) 拙稿「新しいユニバーサル・プロジェクションの形成をめざして②, ユニバーサル・プロジェクション(U.P.)の種々相」『コンステラティオン』、No.277、1993年5月。以下の論述はこの論文にほぼそっている。
- 13) ピアジェ・J.『思考の心理学』滝沢武久訳、みすず書房、1968
- 14) 蔵内数太『社会学』、培風館、1962、pp.162～166。『拙著』pp.227～229
- 15) エンデ・M.『モモ 時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子のふしぎな物語』大島かおり訳、岩波書店、1976
- 16) 松田道雄『自由をこどもに』、岩波新書、1973
- 17) 拙稿「宇宙、地球、人間」pp.216～218、拙稿「新しいユニバーサル・プロジェクションの形成をめざして②」pp.23～24
- 18) バーガー・P. ルックマン T.『現実の社会的構成』山口節郎訳、新曜社、1980。バーガー夫妻

- 『バーガー社会学』学習研究社, 1972
- 19) 『拙著』 pp. 83 ~ 85, pp. 118 ~ 125. 拙稿「新しいユニバーサル・プロジェクションの形成をめざして②」 p. 24 ~ 25
 - 20) リアリティ体験の深さの次元については『拙著』 pp. 110 ~ 112. 参照
 - 21) 夢の中で夢を見る「夢中夢」、劇の中で劇が演ぜられる「劇中劇」などのリアリティの錯図化の問題については『拙著』 pp. 69 ~ 70 参照
 - 22) 『校本宮沢賢治全集』第14巻 筑摩書房, 1977, p. 556
 - 23) 『宮沢賢治全集』第10巻 筑摩書房, 1967, pp. 292 ~ 293
 - 24) 同上 p. 293
 - 25) フーコー. M. 『狂気の歴史』『臨床医学の誕生』『監獄の誕生』
阿部謹也『ドイツ中世後期の世界』未来社, 1974. 『中世の窓から』朝日新聞社, 1981. 『中世を旅する人々』平凡社, 1978. 網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店, 1984. 『無縁・公界・楽』平凡社, 1978. 『中世再考』日本エディタースクール, 1986
 - 26) 自然科学者としての賢治が1920年代当時の水準の天文学, 物理学の知識で考えていた宇宙観については, 原子朗編著『宮沢賢治語彙辞典』東京書籍, 所収の「銀河系, 宇宙塵, 第四次元」などの項参照
 - 27) フッサール. E. 『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳, みすず書房, 1967, p. 39. メルロ・ポンティ. M. 『知覚の現象学2』竹内・木田・宮本訳, みすず書房, 1974, p. 316. 『拙著』 pp. 9 ~ 11, pp. 404 ~ 408
 - 28) 自己定義の意義と筆者が行った調査については『拙著』 7-4 論文「自己を定義することについて」参照
 - 29) 梅原猛「修羅の世界を超えて」『地獄の思想』中公新書, 1967, 所収
 - 30) 原子朗 前掲辞典, 修羅の項, pp. 341 ~ 342
 - 31) 分別, 分節, わける, わかる, という問題に関しては, 『拙著』 5-1 ~ 5-3, 「わかるということの多層性について——弁証法的な身体の現象学の立場からの基礎的考察——」(I)~(III), pp. 97 ~ 221 参照

1993年9月30日 受理